

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

島嶼世界の20世紀

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5169

島嶼世界の20世紀

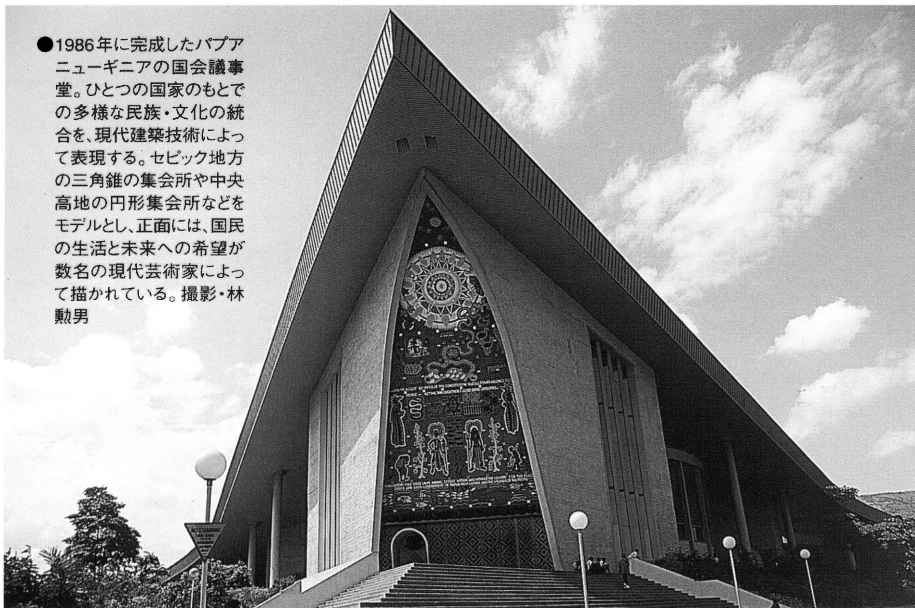
須藤健一

南太平洋の呼びとは、19世紀から20世紀にかけて、キリスト教や貨幣経済の浸透、西欧列強による植民地支配などを経験した。かれらは、固有の文化や伝統の喪失を余儀なくされてきたが、一方的に弱者の立場にあったわけではない。植民地支配に抵抗し、また欧米の文明をとりいれてきたたかに「新しい伝統」をつくりあげている。

国家建設の高邁な理念

第2次世界大戦後、多くの島じまは、外国へ留学したエリートと伝統首長の指導のもと、西欧の国民国家を手本に国づくりをおこなってきた。現在、太平洋地域に12の独立国家が誕生している。最初に国家の産声をあげたのは、1962年の西サモア（現サモア）である。民族自決の国際世論、宗主国の経済事情などにより、1970年代からあいついで新しい国が生まれた。単一民族からなるサモア、トンガ王国、パラオ共和国、インド系住民と人口を二分するフィジー、数百ものワントク（民族）からなるパプアニューギニアと、国家の成り立ちは大きく異なる。人口410万の「大国」パプアニューギニアから1万弱のツバルまで、島嶼国の総人口は600万にすぎない。まさにマイクロステート（極小国家）とよばれるゆえんである。

小国家とはいえ、いずれの国も高邁な理念のもとに国家建設に着手した。欧米文明をうのみにするのではなく、民族の伝統と文化を



●1986年に完成したパプアニューギニアの国会議事堂。ひとつの国家のもとでの多様な民族・文化の統合を、現代建築技術によって表現する。セビック地方の三角錐の集会所や中央高地の円形集会所などをモデルとし、正面には、国民の生活と未来への希望が数名の現代芸術家によって描かれている。撮影・林勲男

●南太平洋の現代

- 1919年 サマセット・モームが『月と6ペンス』を発表
- 1922年 日本がパラオ諸島のココロル島に南洋庁を設置
- 1929年 日本人芸術家、土方久功がパラオへ
- 1941年 日本が真珠湾攻撃、対米戦開始。日本軍がグアム島占領
- 1945年 テニアン島から広島へ向けB29が発進し、原爆投下。日本敗戦
- 1946年 アメリカ、ビキニ環礁で第1回原爆実験
- 1954年 アメリカ、ビキニ環礁で第1回水爆実験、第5福竜丸被爆
- 1962年 西サモア独立
- 1970年 フィジー独立
南太平洋大学設立（本部はフィジーのスバ）
- 1975年 パプアニューギニア独立
- 1978年 ソロモン諸島独立
- 1980年 ヴァヌアツ独立
- 1985年 グリーンピースの「虹の戦士」号、オークランド湾で爆破され沈没
- 1987年 フィジーで連立内閣成立直後に、軍事クーデター。フィジーが共和国宣言
- 1988年 オーストラリア建国200年祭、先住民アボリジニが反対デモ
- 1989年 パプアニューギニアのブーゲンヴィル銅山、土地問題をめぐる対立から閉鎖
- 1990年 ニュージーランドでワイタンギ条約150年記念式典
- 1994年 ニューブリテン島の火山が噴火、大量の火山灰でラバウルに大きな被害
- 1995年 フランス、ムルロワ環礁で核実験再開、パペーテで大規模な抗議デモ
- 1996年 フランス、ポリネシアでの核実験終了
- 1998年 パプアニューギニアの北岸で地震による津波発生、死者・行方不明者2000名を越える大惨事となる

維持しながら近代化をすすめようという「パンフィック・ウェイ」を掲げたフィジー、キリスト教と伝統の融合を国是とするヴァヌアツ、島じまの文化と歴史のちがいを認めあい、人びとの連帯を訴えるミクロネシア連邦など、実に多様である。1994年に独立した世界でもっとも新しい国パラオ共和国は、戦争と核兵器のない世界を憲法にうたっている。この背景には植民地時代に被った悲惨な戦争体験がある。

近代と伝統の使いわけ

国際連合に加盟し、域内の連帯をつよめる南太平洋フォーラムを結成するなど国際社会への仲間入りははたしたが、島嶼国の経済は難問をかかえている。地下資源豊かなパプアニューギニア、製糖産業や観光開発などで経済的自立をめざすフィジーをのぞけば、ほとんどの国は国家財政を旧宗主国や先進国からの援助に依存するしかない。世界の中心から辺境の地であり、経済的に分断され、そのうえ国土面積や人口規模がきわめて小さいなど、産業発展の可能性はかぎられている。

このような国家経済にもかかわらず、国民の生活水準はアジア諸国にくらべかなり高い。欧風の家、電化製品、車を持ち、子弟を大学に進学させる家庭が多いのは、ポリネシアやミクロネシアの国くに共通している。これは、国家経済に期待しない国民自らが、海外へ出稼ぎにでたり、移住して、本国の家族に送金することで実現しているのである。

しかしながら、ディアスポラ(故国離散)の生活を優先してまで、近代的な生活様式のみを追いもとめているわけではない。パソパラギ(白人)のやり方とファ・サモア(サモア流)、アメリカン・ウェイとシュウカン(パラオの習慣)などの

言葉でしめされるように、「文明圏」の生活スタイルと祖先から受け継いできた生活慣行とを明確に区別している。また、パプアニューギニアの近代的建物や国会議事堂の正面には、仮面や楯、伝統的生業形態やあるべき社会の未来像が描かれている。民族文化をデザインすることで、国民としてのアイデンティティと国家統合を象徴しているのである。

国家建設後30年を経た島嶼国家は、国際規格に適合する国民国家の体裁を整える一方で、伝統的な政治のしくみやリーダーシップを温存し、固有の慣行や文化を国民生活の基本にすえることによって国家運営をおこなってきた。21世紀を生きる島嶼国は「島魂外才」を指針とし、その実現にむけて試行しているのである。



●久びきに入荷した灯油を買いに、島で唯一の給油所に集まってきた人びと。船便は不定期なため、灯油にかぎらず物資は途切れがちである。キリバス国タビテウエア環礁。撮影・風間計博